

## トーンハレ管が 50人の聴衆でコンサート

4月19日に連邦政府が感染防止対策緩和を発表した直後の22、23日、半年ぶりにチューリヒ・トーンハレ管交楽団は50人の聴衆を入れたコンサートを決行した。前音楽監督のリオネル・ブランギエを招き、ブラームス《悲劇的序曲》+マルクゥアンドレ・ダルバヴィ「フルート協奏曲」を2回、ラフマニノフ「交響曲第3番」を3回、2日間て計5回の強行スケジュールだ。プレス招待枠は一人1回ということで、23日の昼の部にラフマニノフを聴いた。

聴衆の動線が交差しないように、ホール右側だけに2、3席空けて50席が配置された。「ランチ・コンサートだからカジュアルに」と、トーンハレのTシャツを着たブランギエの指揮は、冒頭では空回りし、音楽が伴わない。ドラマティックな展開部でようやく気持ち合い始めたが、せっかく効果的に膨らんだフレーズもテンションが保たれないのが残念だ。しかしテンポの変り目の統率力はすばらしい。弦のユニゾンの美しさと広がり包まれ、大きすぎるほどの生の音を浴びた聴衆は立ち上がって拍手を送った。

## チューリヒ歌劇場の 新演出ライヴ配信

4月11日にチューリヒ歌劇場でプレミエを迎えたオッフエンバック《ホフマン物語》新演出は、まだ無観客上演しか許されず、ライヴ配信された。今回は初日2日前に演出を担ったアンドレアス・ホモキ総裁、指揮のアントニーノ・フォリアーニ、主演のサイミール・ビルグを招き、ドラマ

トゥルグが司会をした作品談義も配信され、観客の期待を膨らませた。

当日は同じ司会者が上演を誘導する形で映像番組としての完成度も高かった。オーケストラと合唱が練習場から遠隔共演する形は、ストリーミングでは違和感なく聴こえる有効な解決策だ。

幕が開くと大きな権が奈落から上がってきて、中からミューズのアレクサンドラ・カドゥリナが出て来る。月桂樹の冠を外すとニクラウスになる設定で、両性具有の美しさと歌唱力が魅力的だ。アンドリュウ・フォスター・ウィリアムスは憎らしい悪役4役に徹した。題名役デビューのビルグは、冴えないホフマンに扮し、ふだんのマツチヨナオーラが薄れて興味深い。ステラのエリカ・ペトロチエリはオペラスタジオ生とは思えない存在感。合唱の代わりに被りもののマスクを着けた20人強のエキストラが学生たちを演じた。

3人の女性の家に共通して使われる三次元柄の床が効果的に使われる舞台も秀逸だ。オリンピア役のカトリーナ・ガルカは、当歌劇場デビューと初役にもかかわらず好演した。

休憩中には数人のライヴ・インタヴューが挟まれた。駆け出しのころから当歌劇場に出演し続けているビルグは「ファビオ・ルイジやネッロ・サンティ、ニコラウス・アーノクタールら大指揮者と共演できた世界でいちばんすばらしい歌劇場の一つ」と語った。

アントニーアのエカテリーナ・バカノヴァは、声に豊かな温かみがなく、アントーニアに起用された理由が見えない。速いパッセージなどは声の焦点を集めて上手く歌えるのだが、抒情的なメロディになる

と破綻し、高音も毎回伸びない。母親役のユディット・シユミートも同様にレガートと温かさに欠けたため、クライマックスへの高揚感が得られなかった。最後に前述の床が急傾斜してピアノが落ちる演出はスリリングだった。

2度目の休憩中には歌い終わったヒロイン二人や首席チェリスト、美声のナタナエルを歌ったオメア・コピリアクとヘルマン役のヤニク・デヴォスへのインタヴューが流れ、視聴者は休憩なしで4時間座り続けることになる。

床がゴンドラのように揺れる第4幕を経て、第5幕まで声のパワーを保ち続けたビルグと、望みが繋がるエンディングに、爽快感を残した。観客の好奇心を満足させる情報満載の、豪華なストリーミングとなった。

## 「Souvenir」から

その他、先月より続く過去の名演集「Souvenir」では、アレヴィ《クラリ》(2008年)が4月1日から6日まで、フンバーディンク《王様の子供たち》(2010年)は23日から26日まで配信された。前者は作曲者がマリア・マリブランを想定して書いた作品であり、マリブラン生誕200周年にチェチーリア・バルトリが題名役を歌って劇場のレパートリーに復活させた作品だ。指揮のアダム・フィッシャーは序曲から成功を取めた。パトリス・コリエ&モーシエ・ライザーの演出はビビットな色彩とユーモアを散りばめ、初日に歌劇場で観たと

きよりストリーミングに向いていると思われる。バルトリの高い芸術性はライヴ演奏でなくても十分胸に迫るが、最後のアリアのあと、鳴り止まない拍手がリスミカルなコールに変わると、泣きそうな顔になるところなど、実際の劇場では見られないズームアップ映像も貴重だ。伯爵のジョン・オズボーンの輝かしい歌唱も懐かしく、当時常連だったエヴァ・リーバウもベッティーナとアディーナを好演した。

後者はインゴ・メッツマッハーの安定した指揮と、イザベル・レイの少女役も上手いが、「お宝映像」としての価値は、ヨナス・カウフマンの瑞々しい声と若者ぶりを懐かしめることだろう。



「Souvenir」から。《王様の子供たち》でのカウフマン ©Suzanne Schwierz